

貨幣生成の必然性

小 林 威 雄

前稿「貨幣生成の理論について」(『立教経済学研究』、第二〇巻第四号、所収、昭和四二年二月)においてのべたように、貨幣は、「商品に内在する価値性質により」必然的に商品そのものから生成してくる。そこで、貨幣の生成の問題をとりあつかうためには、なによりもまず商品とはどういうものか、商品とはなにか、ということが理解されていなければならぬ、ということになる。商品について考察し、研究することは、たんに商品についての理解を学びとることだけでなく、貨幣がなぜに、いかにして、なによつて生成してくるのかということを学びとることにもなる。なぜならば、貨幣は商品そのものから必然的に生成してくるわけであるから。

ところで、われわれの眼のまえにおかれている商品は、二重の観点のもとでわれわれに「自分は商品である」ということをいいあらわしている。われわれは、ひとつの建物のなかに数千、数万種類の諸商品がにぎやかにかざられているデパートへいってみよう。デパートの地階には食料品売場がある。そこには、人間の食欲、嗜好をみたすのに十分な食料品や嗜好品のかずかずが数多くならべられている。食料品、嗜好品としてならべられている諸商品は、それぞれ

れが個々別々にもっている自然的な属性によって、人間の食欲、嗜好という複雑な、微妙ないろいろな欲望をみたすものとして存在している。つまり、食料品や嗜好品としての諸商品は、人間の胃の腑から、人間の肉体から生ずる食欲や嗜好という人間の欲望をみたすものとして存在しており、こういうかたちで自分自身をいいあらわしている。ところが、これらの諸商品は、たんにこういうかたちで自分自身をいいあらわしているばかりでなく、同時にこういう表現のしかたとはことなつたべつのかたちでも自分自身をいいあらわしている。それはどういふふうにあるかという、何百円とか、何千円とかというふうにある。したがって、デパートの地階にならべられている食料品や嗜好品などの諸商品は、一方では、人間の食欲や嗜好をみたす性格をもっていますと、一方では、何百円とか、何千円とかというふうにかたちにおいて、他方では、何円というかたちにおいて、二重の観点のもとで自分自身をいいあらわしているわけである。

こんどは、おもむきをかえてエレベーターにのつて六階にあるダイヤモンド・コーナーへいつてみよう。ここには、ダイヤモンドをかざりつけられた指環やネクタイピンなどのダイヤモンドでつくられた装飾品が、さきの食料品売場にくらべれば豪華に贅沢にかざりつけられ、しかも鍵をかけられたショー・ウィンドのなかにならべられている。ダイヤモンドの装飾品は、人間の食欲や嗜好をみたすというような自然的な属性はもっていない。しかし、ダイヤモンドの装飾品は、人間の胃の腑から生ずる欲望はみたすことはできないが、人間の美にたいする観賞や虚栄などをあらわすものとして装飾という人間の欲望をみたすという自然的な属性をもっている。ダイヤモンドの装飾品は、人間のこのような欲望をみたすものとして存在しており、こういうかたちでそれらは自分自身をいいあらわしている。しかし、ダイヤモンドの装飾品は、こういうかたちでだけしか自分自身をいいあらわしているわけではない。ダイヤモンドの装飾品は、他方では、何万円とか、何百万円とかというかたちにおいても自分自身をいいあらわして

る。つまり、ダイヤモンドの装飾品は、一方では、人間の装飾という欲望をみたくす性格をもっていますとかたちにおいて、他方では、何円というかたちにおいて、こういう二重の観点のもとにおいて自分自身をいいあらわしているわけである。

食料品とダイヤモンドの装飾品とをくらべてみればいろいろのちがいがあつた。それらがあつて自然な属性はことなつており、ことなつた人間の欲望をみたくすものである。つまり、それらの物の有用性はことなつてゐる。これらの有用物の量的な大きさをはかる単位は、食料品は何グラムというように、ダイヤモンドの装飾品は何カラット（宝石の重さをはかる単位）というように、それぞれことなつてゐる。またそれらが自分自身をいいあらわしてゐるひとつの観点である何円というその金額もことなつており、一個あたりでいへば大きな量的なちがいがあつた。だがしかし、つぎのような点においては、食料品もダイヤモンドの装飾品もおなじであるといふことができるであらう。それは、食料品もダイヤモンドの装飾品も人間のなんらかの種類の欲望をみたくすという自然な属性、いいかえれば有用性をもつてゐる物であるという点、そして食料品もダイヤモンドの装飾品もいづれも何円というようにつけられており、その金額でお売りしましょう、買ってくださいという価格といわれるものがつけられてゐるという点である。人間のなんらかの種類の欲望をみたくすという自然な属性をもつてゐるという点において、また何円という価格がつけられてゐるという点において、この二つの点においては食料品もダイヤモンドの装飾品もなんらかの種類の欲望をみたくす自然な属性、有用性をもつてゐる物であるといふことは、使用価値をもつてゐる物であるといふようにいわれる。したがつて、商品は、一方では、人間のなんらかの種類の欲望をみたくす物であるという観点のもとで自分自身をいいあらわし

ているということは、商品は、一方では、使用価値という観点のもとで自分自身をいいあらわしているというようにいう。後者の価格というのは、のちにあきらかにされるが、商品のもつ価値を貨幣によって表現したものであって、これを抽象していき、もつともかんたんな一般的いかたでいえば交換価値といわれる。したがって、商品は、何円という価格という観点のもとで自分自身をいいあらわすということは、交換価値という観点のもとで自分自身をいいあらわすということができる。われわれの眼のまえにおかれている諸商品は、いずれも使用価値と価格という二重の観点のもとで自分自身をいいあらわしているわけであるが、価格は商品の価値の貨幣的表現であり、価値が表現されたものを交換価値というようにいうから、かんたんにいえば、商品は、使用価値と交換価値という二重の観点のもとで自分自身をいいあらわしているというようにいうことができる。

「それぞれの商品は、使用価値と交換価値という二重の観点のもとに自己をあらわしている」（『経済学批判』、S.15、国民文庫版、杉本俊朗訳、一三三ページ）。

諸商品は、このように、それぞれ使用価値と交換価値という二重の観点のもとで自分自身をいいあらわしている。したがって、商品について考察し、商品を理解するためには、まず使用価値と交換価値という諸商品がそれぞれ自分自身をいいあらわしている二重の観点において、あるいは二重の側面において分析がなされていかなければならないということになる。そこで、つぎに、『資本論』第一巻第一章第一節および第二節においてのべられていることによりながら、使用価値および交換価値という二つの側面から商品を分析していき、商品とはどういうものか、商品とはなにか、それはどういう要因からなりたっているものであるかということ、さらに商品に表示されている労働の性格などについてあきらかにしていくことにする。

商品は、まず人間のなんらかの種類の欲望をみたすところの外的な対象であり、ひとつの物である。商品はず人間のなんらかの種類の欲望をみたす物であるが、それが人間のなんらかの種類の欲望をみたし、人間にとってやくだつ有用な物であるということは、それがもっている自然的な諸属性によって制約されている。そして、この人間にとってやくだつという有用性は、その物の実在のなかにのみ存在するのであって、物体がなければ実存することはできない。物の有用性は、空中にうかんでいるわけではけつてない。つまり、それぞれの商品がもっている人間のなんらかの種類の欲望をみたすという性格、有用性は、それぞれの商品体の自然的な諸属性によって制約されており、そして、商品体がなければ実存することができないということになる。

ところで、人間の欲望というのは、人間が人間として生存し、かつ発展していくためにぜひとも充足しなければならぬというものであり、それには肉体的欲求および精神的欲求とがともにくまれている。したがって、人間のなんらかの種類の欲望というばあい、その欲望とは、胃の腑から生ずるものであると、あるいは幻想から生ずるものであると、なんらさしつかえないということになる。また、物が直接に生活手段として、すなわち享樂の対象として人間の欲望をみたすか、あるいはそうではなく迂回的に生産手段として人間の欲望をみたすかということ、いいかえれば、物がいかにして人間の欲望をみたすかということも、ここではどうでもよいことである。

たとえば、鉄、紙のような有用物は、いずれも二重の観点のもとで考察される。ここでいう二重の観点とは質と量との見地である。鉄、紙のような有用物は、いずれも多くの諸属性をもつひとつの物であるから、それらはいろいろ

の方面に利用されうる。つまり、おなじ物であっても、それはいろいろの用途に利用されうる。けれども、それがどういう用途に利用されるかというその可能な利用の範囲は、それがもっている自然的な諸属性によって制約されている。おなじ物がいろいろの用途に利用され、有用であるということを見出すことは、いいかえれば「諸物の多様な使用の仕方」を見出すことは、歴史的な行為である。有用物は、このように質的に規定されているが、そればかりでなく量的にも規定されている。諸有用物は、たとえば鉄なら何トン、紙なら何帖、リンネルなら何エルレなどというようにその量をはかるいろいろの尺度をもっている。これらの諸有用物の量をはかる社会的な諸々の尺度をみいだすことも、また歴史的な行為である。諸有用物の量をはかる諸尺度の差別は、一部は度量されるべき諸対象の本性の差別から生じ、一部は慣習から生ずる。

ある物の有用性は、その物を使用価値たらしめる。ある物は、人間のなんらかの種類の欲望をみたすという性格、すなわち有用性をもつことによって使用価値となる。ところで、まえにのべたように、物の有用性は、その物もっている自然的な諸属性によって制約されており、そしてその物なしには実存しえない。したがって、たとえば、鉄、紙、小麦、リンネル、ダイヤモンドなどのような物そのものがひとつの使用価値なのであり、財なのである。商品は、人間のなんらかの種類の欲望をみたすという性格、有用性によって、それは使用価値をもつというようにいわれるが、この商品の使用価値は、商品の体からきりはなされて存在するものではないから、商品体そのものがひとつの使用価値となる。商品体のこの性格は、商品体を使用するうえでの諸属性を獲得するために人間が多くの労働をついやしたとか、あるいは僅かな労働しかついやさなかったとか、というようなことにはなんの関係ももっていない。諸使用価値を考察するさいには、何トンの鉄とか、何帖の紙とか、何ブッシェルの小麦とか、何エルのリンネルとか

何カラットのダイヤモンドとか、というように、つねにそれらの量的規定性が前提される。諸商品の諸使用価値は、独自の一研究分野である商品学に材料を提供する。

使用価値は、使用しない消費においてのみ実現される。

ところで、使用価値は、富の社会的形態がどのようなものであろうともそれにかかわりなく、つねに富の質料的内容をなしている。たとえば、小麦を味わってみても、それをだれがつくったか、農奴がつくったか、近代的な農業労働者がつくったのか、というようなことはわからない。したがって、使用価値をいくら分析してみても、それが商品であるかどうかということを認知することはできない。使用価値は、たとえ社会的な欲望の対象であり、したがってまたそれは社会的関連のなかにあつたとしても、なんらの社会的生産関係をも表現するものではない。使用価値であるということは、商品にとって必要な前提であるというように思われるが、商品であるということは、使用価値とは無関係な規定なのである。つまり、商品は、一方において、かならず使用価値をもつものでなければならず、なんらかの使用価値をもつことが商品にとって必要な前提条件ではあるが、しかし、使用価値をもっているからといって、ただちに、それは商品であるというようにはいことができないのである。ある有用物が商品であるかどうかを規定することは、使用価値という観点においてはできないことなのである。このように経済的形態規定にたいして無関係な使用価値は、すなわち使用価値としての使用価値は、経済学の考察の範囲のそとにおかれる。つまり、使用価値そのものは、経済学の研究対象にはなりえない。使用価値が経済学の考察の範囲のなかにはいってくるのは、使用価値がそれ自体、経済的形態規定である**ば**いだけである。^(註)

いま、われわれが考察の対象としている商品生産社会においては、使用価値は、富の質料的内容をなしていると

時に、交換価値の質料的担い手をなしているということである。

(註)

使用価値が経済学の考察の範囲のなかにはいつてくるのは、使用価値がそれ自体、経済的形態規定であるばあいであるが、それは、たとえばどういう使用価値であるかといえば、貨幣が貨幣としてもつ使用価値および貨幣あるいは商品が資本として機能する使用価値である。

「諸商品が互いに交換価値としてあらわれあうためには、その存在をこのように二重化するとすれば、一般的等価物として排除された商品も、その使用価値を二重化する。特殊な商品としてのその特殊な使用価値のほかに、それは一つ一般的な使用価値をもつことになる。こういうその使用価値は、それ自体、形態規定性であり、すなわち他の諸商品がこの商品に交換過程で全面的にはたらきかけることによってこの商品が演じる独特な役割から生じるものである」(『経済学批判』、S.33. 邦訳、五三、ページ)。

「貨幣——というのは、ここでは、ある価値額の自立的表現を意味し、事実上その価値額が貨幣として実存するか商品として実存するかをとわない——は、資本制生産の基礎上では資本に転化されるのであって、この転化により、あるあたえられた価値から、みずからを増殖し増加する価値となる。それは利潤を生産する。すなわち、それは、資本家をして、一定分量の不払労働、剰余生産物および剰余価値を労働者からひきだして取得することを得せしめる。かようにして貨幣は、貨幣として有する使用価値のほかに、一つの追加的な使用価値、すなわち、資本として機能するという使用価値をうけとる。貨幣の使用価値は、このばあいには、まさに資本に転化した貨幣が生産する利潤に存する」(『資本論』、第三卷、S.370~1. 長谷部文雄訳、青木版、第三部、四八〇ページ)。

つぎに、諸商品が、それぞれ自分自身をいいあらわしているもうひとつの観点である交換価値という側面を分析してみよう。

交換価値は、さしあたり、ある種類の使用価値が他の種類の使用価値と相互に交換されるところの量的関係・比率としてあらわれる。この側面においては、商品というものは、交換されるものであるという性格をしめしている。た

たとえば、一クォーターの小麦が一着の上衣と交換されるものとするれば、 $1\text{クォーターの小麦} = 1\text{着の上衣}$ という等式でいいあらわされる量的な関係において一クォーターの小麦の交換価値がいいあらわされている。つまり、一クォーターの小麦の交換価値は一着の上衣であるというように。ここでは、一着の上衣は、一クォーターの小麦の交換価値である。この量的な割合、比率は、時と場所がことなれば変動する。したがって、交換価値は、なにか偶然のことで、まったく相対的なもののようにみえて、商品の内在的な、本質的な要因のようにみえない。はたして、交換価値は偶然的で、まったく相対的なものであろうか。交換価値をさらに分析してみよう。

ひとつの商品、たとえば一クォーターの小麦は、ただ一着の上衣とだけ交換されるというわけではなく、その他の諸商品、たとえば、X量の靴墨とも、Y量の絹とも、またZ量の金とも交換される。したがって、一クォーターの小麦の交換価値は、ただひとつ一着の上衣であるばかりでなく、X量の靴墨も、Y量の絹も、またZ量の金も、いずれも一クォーターの小麦の交換価値である。小麦は、多様な諸交換価値をもっているわけである。ところで、このばあい、一着の上衣も、X量の靴墨も、Y量の絹も、またZ量の金も、いずれもおなじように、一クォーターの小麦の交換価値なのであるから、これらは相互におきかえられることのできるものであり、また互に同等な大きさの諸交換価値でなければならぬ。そこで、つぎのようなことがでてくる。第一に、おなじ商品の諸交換価値は、ひとつの同等なものをお願いあらわしているということ、第二に、交換価値は、総じてただそれと区別されうるある内実の表現様式であり、現象形態であるにすぎないということ、である。

それでは、この内実、内在的なものとはなんだろうか。

二つの商品、たとえば小麦と上衣とを例にとってみよう。この二つの商品の交換の比率がどのようなものであろう

とも、その交換関係は、つねにあるあたえられた分量の小麦が、どれだけかの分量の上衣に等置されるひとつの方程式、たとえば $1\text{ク} + 1\text{ウ} = 1\text{麦}$ の $1\text{麦} = 1\text{ウ} + 1\text{ク}$ という方程式によっていいあらわすことができる。この方程式はどいうことを意味しているのであろうか。それは、おなじ大きさのある共通なものが二つのあいことなつた物のなかに、すなわち一クォーターの小麦のなかにも、一着の上衣のなかにも存在しているということの意味している。したがって、両者——小麦と上衣——は、前者——小麦——でも、後者——上衣——でもない、ある第三のものに等しいということになる。この共通なものは、小麦でも、上衣でもない、ある第三のものでなければならぬ。小麦と上衣とは、それらがいずれも交換されるかぎりにおいては、この第三のものに還元されるものでなければならぬということになる。それでは、この共通の第三のものとはなんであらうか。

それは、商品の自然的な諸属性ではありえない。諸商品の自然的な諸属性が問題となるのは、それらの自然的な諸属性が諸商品を有用ならしめるというかぎりにおいてである。すなわち、諸商品を使用価値たらしめるかぎりにおいてである。そして、諸商品が互に交換されることのできるものは、それぞれの使用価値をことにしているからである。使用価値がおなじであるならば、交換の意味はなりたたないであらう。したがって、交換ということは、あいことなる使用価値が交換されるということであり、このあいことなる使用価値を互に等しいという関係におくことである。交換の内部においては、ひとつの使用価値は他のどの使用価値ともまったく同等であるということになる。商品は、使用価値としてはあいことなる質であるが、交換価値としてはおなじ質のあいことなる量なのであって、それには使用価値はまったくふくまれていない。諸商品の交換関係の特徴づけるものは、それらの使用価値を捨象するということなのである。

このように、諸使用価値が度外視されるということになれば、それらになお残るものは、労働生産物であるという属性だけである。ところが、すでに、労働生産物の有用性という性格、使用価値は捨象されているのであるから、労働生産物を使用価値たらしめている労働の有用性という性格も消え去っているわけである。指物労働とか建築労働とか紡績労働とかというような労働の具体的形態は捨象されているのであるから、なお残る労働生産物という性格は、一定の生産的労働の生産物であるということではない。そうではなく、それは、相互にまったく区別のない、それゆえにすべてが質的にまったくおなじような人間の労働生産物であるという共通の性格である。商品の交換関係においては、それぞれの商品は、同等な、共通なものとして残された人間の労働——抽象的・人間的労働——に還元されているのである。労働生産物になお残っているのは、無差別な、おなじ質の抽象的労働の、すなわちその支出の形態にかかわりのない人間の労働力の支出のたんなる凝結にはかならないということである。労働生産物は、その生産において、人間的労働が支出されており、抽象的労働が堆積されているということを表示するにすぎない。労働生産物は、このような共通の社会的実体Ⅱ抽象的・人間的労働の結晶したものである。価値、商品価値なのである。かくして、交換価値にあらわされている共通なものとは、商品の価値である。商品の価値の実体は、抽象的・人間的労働であり、この抽象的・人間的労働の対象化されたもの、いいかえれば結晶が商品の価値であり、この価値の表現様式、もしくは現象形態が交換価値なのである。

このように、ある商品が価値であるのは、あるいは価値をもつのは、そのなかに抽象的・人間的労働が対象化され、物質化されているからにはかならない。それでは、商品の価値の大きさは、いかにして度量されるのか。価値の実体は抽象的・人間的労働であるから、価値の大きさは、その実体である抽象的・人間的労働の分量によって度量さ

れる。ところで、労働そのものの分量は労働の時間的継続によって度量されるから、労働時間はさらに、時間とか、日とか、週とかという一定の時間部分をその度量標準としている。

もし、一商品の価値がその生産中に支出された労働の分量によって規定されているとすれば、ある人が怠惰であるか、または不熟練であればあるほど、かれはその商品をつくりあげるのにそれだけより多くの時間を必要とすることになるから、かれの商品はそれだけ価値が多いようになるのであろうか。けっしてそのようにはならない。それは、価値の実体である労働は抽象的・人間的労働であるが、この抽象的・人間的労働とは同等な人間的労働、つまり同等な人間的労働力の支出であるからである。商品世界の諸価値で表示される社会の総労働力は、無数の個人的な諸労働力からなりたってはいるが、このばあいには、一個の同一の人間的労働力として意味をもっているのである。これらの個人的な諸労働力は、諸価値で表示される社会の総労働力の一分子としては、それは、社会的な平均労働力という性格をもつものとして、このような社会的な平均労働力として作用するのである。個人的な諸労働力は、一商品の生産において平均的に必要な、あるいは社会的に必要な労働時間を要するにすぎないというかぎりにおいては、他とおなじ人間的労働力である。平均的に必要な労働時間、あるいは社会的に必要な労働時間というのは、「現存の社会的、標準的な生産諸条件と労働の熟練および強度の社会的な平均度とをもって、なんらかの使用価値を生産するために必要とされる労働時間」(『資本論』、第一巻、S. 53 邦訳、二〇ページ)ということである。つまり、社会的に必要な労働時間とは、なんらかの商品を生産するために、たんに個人的に必要なとされる労働時間ではなくして、第一に、生産手段や生産方法といったような生産諸条件が社会的にみて平均的、標準的なものであり、第二に、労働の熟練度、すなわち単位時間あたりどれだけの量の生産物を生産するかという点において、また労働の強度、すなわち単

位時間あたりどれだけの量の抽象的・人間的労働力が支出されているかという点において、社会的な平均度にある人が、その商品を生産するために必要とする労働時間ということである。

したがって、商品の価値の大きさを規定するものは、その商品の生産のために社会的に必要な労働の分量、または社会的に必要な労働時間であるということになる。

そこで、商品の価値の大きさは、その商品の生産に社会的に必要な労働時間が不変であるならば、いぜんとして変わらないということになる。ところが、この商品の生産に社会的に必要な労働時間は、労働の生産力の変化につれて変動する。労働の生産力とは、単位時間に生産される生産物の分量の度合である。この労働の生産力は、種々の事情によって規定されるが、そのおもな規定要因は、労働者の熟練の平均度、科学とその技術的な応用の発展段階、生産過程の社会的結合、生産手段の範囲と作用能力、自然的諸事情などである。一般的にいえば、労働の生産力が大であればあるほど、ある商品の生産に社会的に必要な労働時間はそれだけ小となり、したがってその商品の価値も小さくなる。かくして、一商品の価値の大きさは、その商品にみずから社会的に実現する労働の分量に正比例して変動し、労働の生産力に逆比例して変動するということになる。

商品は、第一節においてのべたように、使用価値と交換価値という二重の観点のもとで自分自身をいいあらわしている。そこで、第二節のいままでのところで、この商品が自分自身をいいあらわしている二重の観点をべつべつに、すなわち交換価値の質料的担い手として使用価値を考察し、ついで交換価値を考察するというようにみてきた。商品の分析において、経済学的に重要な観点は交換価値であるということをあきらかにし、交換価値を分析して、その本質としての価値をあきらかにし、価値の実体は抽象的・人間的労働であり、抽象的・人間的労働が対象化したもの、物

質化したものが価値であるということのべ、さらに価値の大きさを規定する社会的に必要な労働時間についてのべた。そして、交換価値というのは、価値の表現様式、もしくは現象形態であるということが理解されたはずである。商品は使用価値と交換価値という二重の観点のもとで自分自身をいいあらわしているのであるが、それは、商品が使用価値と価値という二つの要因をかならずもっているものであるからである。そこで、使用価値と価値とが商品の二つの要因であるということをやよりよく理解するために、それぞれ商品ではない若干の例をあげて説明しておこう。

(一) 空気、処女地、自然の草地、野生の立木などのような物

これらの物は、人間のなんらかの種類の欲望をみたとすという有用性をもっている。したがって、使用価値をもっているということになる。しかし、これらの物は、人間の労働によってつくりだされた労働生産物ではなく、人間の労働によって媒介されていない。したがって、これらの物には、価値の実体である抽象的・人間的労働はなんら対象化されていない。つまり、これらの物は価値をもっていない。これらの物は、使用価値であるが、価値ではない。したがって商品ではありえない。

(二) 自分自身で消費するために生産された物

このような物は、生産者自身のなんらかの種類の欲望をみたとす物であるから使用価値をもっている。そして(一)のばあいの物とはちがって人間の労働によって媒介されており、人間の労働によってつくりだされた物であるから労働生産物である。だがしかし、自分自身で消費するために生産された物は、自分の欲望をみたとすという個人的な使用価値をもっているが、他人のための使用価値、いいかえれば社会的な使用価値はもっていない。したがって、他人の生産物と交換されるというような物ではない。それは、なるほど人間の労働によってつくりだされた物ではあるが、そ

の労働は価値の実体とはなりえず、したがって、自分自身で消費するために生産された物は価値をもっていない。それは、商品ではありえない。

(三) 奴隷の生産した奴隷所有者用の消費物、中世の農奴の生産した封建領主のための年貢穀物や僧侶のための十分の一税穀物、などのような物

これらの物は、生産した者の欲望をみたすための物ではなく、他人の欲望をみたす物であるから、他人のための使用価値、社会的使用価値をもっており、しかも労働生産物である。だがしかし、これらの物は、使用価値としてやくだてられる他人の手に交換をとおして移転されない。これらの物をつくりだすのに支出された人間の労働は、価値の実体とはなりえず、これらの物は価値をもっていない。したがって、これらの物も商品ではありえない。

(四) 無用の物

なんらの使用価値をもたない無用な物は、価値ではありえず、商品ではありえない。これら四つの例にあげられた物は、いずれも商品ではない。

人間の労働によってつくりだされた労働生産物が商品となるためには、その労働生産物もっている社会的使用価値が実現され、やくだてられる他人の手に交換をとおして移転されなければならない。したがって、それを生産するのに支出された労働は、それと交換される他人の労働の生産物に支出された労働と比較され、等置されて、価値の実体としての抽象的・人間的労働に還元されなければならない。つまり、このような労働生産物は、価値をもつことになる。使用価値と価値とは商品の二要因であって、商品はかならず使用価値と価値とをもたなければならないのである。

以上のべてきたように、商品は使用価値と価値という二つの要因をもち、二重の性格をもっている。それと同時に、商品を生産する労働も二重の性格をもっていることになる。この商品において表示される労働の二重の性格について、はじめて批判的に指摘し、解明したのはマルクスであるが、この点は、経済学を理解するための軸点であるから、さらによりくわしく考察してみよう。

商品を生産する労働は、使用価値をつくりだす労働——具体的・有用的労働——と価値をつくりだす労働——抽象的・人間的労働——との二重の性格をもっている。

使用価値としての商品を生産するためには、その目的、作業様式、労働対象、労働手段および結果である生産物などによって規定されている、ある一定の種類の生産的活動が必要である。それは、その生産物の使用価値において表示される労働であって、この労働を具体的・有用的労働という。この観点のもとにおいては、労働はつねに、その有用的效果に関連して考察されるわけである。

たとえば、上衣とリンネルとを例にとってみよう。上衣とリンネルとは質的にことなる使用価値であるのと同様に、それらにふくまれている労働もまた裁縫労働と織物労働というように質的にあいことなっている。もし、これらの物が質的にことなる使用価値ではなく、したがって質的にことなる具体的・有用的労働の生産物でないならば、それらは総じて商品として対応しあうことはできないであろう。上衣と上衣とが交換されるようなことはありえなく、おなじ使用価値がおなじ使用価値と交換されることはない。

あいことなる種類の諸使用価値のなかに、または諸商品体の総体のなかに、おなじように多様な門、科、属、種、亜種、変種をことにする具体的・有用的諸労働の一総体ひとつの社会的分業が現象している。社会的分業は商品生産

の実存条件である。なぜなら、社会的分業が存在しなければ種々の諸使用価値はつくりだされず、種々の諸商品が生産されるということはないからである。しかし、逆に商品生産は、社会的分業の実存条件ではない。「古代インドの共同体では、諸生産物が商品となることなしに、労働が社会的に分割されている。または、手ごかな例をとれば、どの工場でも労働は体系的に分割されているが、しかしこの分割は、労働者たちがかれらの個別的諸生産物を交換するということによって媒介されているのではない」(『資本論』、第一卷、S. 105、邦訳、一二四―一五五ページ)。したがって、商品生産は社会的分業の実存条件ではない。「自立的な、そして相互に、独立的な、私的、諸労働の諸生産物のみが、相互に商品として対応するのである」(『資本論』、S. 106、邦訳、一二五ページ)。

つまり、どの商品の使用価値のなかにも、ある一定の合目的な生産的活動である具体的・有用的労働がふくまれているということがわかった。諸使用価値は、質的にそれぞれことなる具体的・有用的労働がそれらのなかにふくまれているなければ、商品として対応しあうことはできないのである。商品生産社会においては、自立的な生産者たちの私事として相互に独立して営まれる有用的諸労働のこのような質的な区別が、ひとつの社会的分業に発展するのである。

人間は、社会的形態のいかにかわらず、つねに特殊的な、合目的な、生産的な活動によって、特殊的な自然質料を人間の特殊的な欲望に適合させるように変形してきた。したがって、労働は、諸使用価値の創造者としては、つまり具体的・有用的労働としては、人間のどんな社会的諸形態にもかかわりのない、ひとつの存在条件であり、人間と自然とのあいだの質料変換、つまり人間の生活を媒介するための永久的な自然的必然性である。

かくして、諸使用価値、したがって諸商品体は、自然質料と労働という二つの要素の結合したものである。人間

は、その生産においては、自然そのものとおなじようにしかふるまえないのであり、したがって天然、自然に存在する諸質料を変化させうるのみである。そればかりでなく、人間は、この形態を変化させる労働そのものにおいて、たえず諸自然力によって支持されているのである。だから、労働は、それによって生産される諸使用価値の唯一の源泉ではないということになる。

つぎに、商品を生産する労働のもうひとつの側面である価値を形成する労働についてみてみよう。

たとえば、 $T \text{ 織物} = 20 \text{ 日} \times 7 \text{ の} \text{ 織機}$ というように仮定してみると、一着の上衣は二〇エルのリンネルとおなじ大きさの価値をもっているということになる。上衣とリンネルとは、おなじ実体からなる物であり、おなじ種類の同様な労働の客観的な表現であるというわけである。しかし、裁縫労働と織物労働とは質的にあいことなる労働である。この労働の具体的有用的性格を捨象してしまえば、あとに残るものは、ただそれらは人間的労働力の支出であるということになる。裁縫労働と織物労働とは、質的にあいことなる生産的活動であるとはいえ、いずれも人間の脳髓、神経、筋肉、手などの生産的な支出であり、このような意味においては、いずれも人間的労働である。裁縫労働、織物労働は、人間的労働力を支出するための二つのこととなった形態であるにすぎない。商品の価値は、このような人間的労働それ自体を、人間的労働力一般の支出を表示しているのである。このばあいの人間的労働は、「平均的にだれでも普通の人間が特殊な発達をまたないで、その肉体のうちにもっているところの、簡単な労働力の支出である。簡単な平均労働そのものは、なるほど、あいことなる国々および諸文化時代においてその性格を變ずるが、しかし、ある当面の社会においてはあたえられている。複雑労働は、ただ自乗された、またはむしろ倍加された、簡単な労働としてのみ意義をもつのであり、かくして、ある少量の複雑労働は、ある多量の簡単な労働に等しい」(『資本論』、第

一巻、Stap. 邦訳、一二八ページ)。このような労働の還元がたえずおこなわれていることは、経験のしめすところである。いろいろな種類の労働がそれらの度量単位としての簡単労働に還元されている種々の比率は、生産者たちの背後でひとつの社会的過程によって、確立されるのであり、したがって、生産者たちにとっては慣習によってあたえられるかのようにみえるのである。

裁縫労働と織物労働とは、使用価値としての上衣およびリンネルの形成要素であるが、それは、これらの労働のことなる質によってそうなるのである。これにたいして、これらの労働が上衣とリンネルの価値の実体であるのは、これらの労働の特殊な質が捨象され、同等な質、つまり抽象的・人間的労働という質をもつからである。

商品にふくまれている労働は、使用価値にかんしては質的のみ意義をもつのであるが、価値の大きさにかんしては、それがすでに質のどんづまりである人間的労働に還元されているので、量的のみ意義をもつのである。

ところで、まえにも述べたように、ある一商品の価値は、労働の生産力に逆比例して変動する。したがって、使用価値の分量が増加し、同時に、その価値の大きさが減少するということが生じる。このような対立的運動は、労働の二重性から生じるのである。生産力なるものは、つねに具体的・有用的労働の生産力であり、あたえられた時間のなかにおける合目的な生産的活動の作用度のみを規定する。したがって、生産力は、使用価値の生産にのみ関係するものである。かくして、具体的・有用的労働は、その生産力の増大あるいは低下に正比例して、より多量の、あるいはより少量の生産物、つまり使用価値を生産する。これに反して、生産力の変動は、価値で表示される労働とは、まったく無関係である。したがって、おなじ抽象的・人間的労働は、生産力がどのように変動しようとも、おなじ時間のなかにおいてはつねにおなじ大きさの価値をつくりだす。

使用価値と価値との対立的な運動は、商品にふくまれている労働のこのような二重の性格からはじめて説明することができるのである。

さいごに、商品に表示されている労働の二重性について要約してみれば、つぎのようになる。およそ労働は、一方においては、生理学的意味での人間的労働力の支出であって、商品の生産に支出されたこの人間的労働力の支出、抽象的・人間的労働という同等な労働の性格においては、それは商品の価値を形成する。およそ労働は、他方においては、特殊な、目的を規定された形態での人間的な労働力の支出であって、具体的・有用的労働というこの性格においては、それは使用価値を生産する。

三

第二節においては、商品が自分自身をいいあらわしている使用価値と交換価値という二重の観点から商品を分析してみた。そして、商品がもっている二つの要因として使用価値および価値をあきらかにし、さらに、これらの二つの要因をつくりだす労働の二重の性格をあきらかにした。

したがって、商品とは超感性的な価値というものをもつ物であるということになるが、商品が価値をもつということにより、商品は奇妙な、謎的な性格をもつものとなっている。そこで、本節においては、商品の奇妙な、謎的な性格はどうして生ずるのか、つまり、なにゆえに商品は価値という超感性的なものをもたなければならないのか、この奇妙な、謎的な性格はどこから生じるのか、というようなことを『資本論』第一巻第一篇第一章第四節にかかれてい

商品というものは、一見したところでは、まったく自明な、平凡な物のようにみえる。しかし、商品进行分析してみると、そうではなく、きわめて奇怪な、謎的な物であるということがわかる。商品が使用価値であるというかぎりにおいては、商品は人間のなんらかの種類の欲望をみたすところの労働生産物であって、ありふれた感性的な物であり、なんら奇妙な謎的なところはない。しかし、この労働生産物が商品として登場してくると、それは感性的であるとともに超感性的な物となる。このような商品の奇妙な、謎的な、神秘的な性格はどこから生じるのであろうか。

商品の神秘的な性格は、商品の使用価値、あるいは使用価値をつくりだす具体的・有用的労働から生じるものではない。また商品の神秘的な性格は、価値の諸規定の内容から生じるものでもない。第一に、商品の価値の実体をなすものは抽象的・人間的労働であるが、このような人間的労働力一般の支出としての労働そのものには、なんらの神秘的な性格をもとまなっていない。種々の諸労働生産物に対象化されているさまざまな具体的・有用的労働ないし生産的な諸活動は、それらがどのように種類をことにしていようと、それらは人間という有機体の諸機能であるということ、本質的には人間の脳髓、神経、筋肉、感官などの支出であって、いずれも同様であるということは、ひとつの生理学的な真理であって、このこと自体はなんら神秘的なことではない。第二に、商品の価値の大きさを規定する基礎となるものは、商品を生産するために支出される労働の分量であるが、この労働の分量が労働の質から区別されて問題にされるということそれ自体は、いかなる社会においてもありうることであって、べつに不思議な、神秘的なことではない。たとえば、生活に必要な物の生産にどれだけ労働時間がついやされるかということ、いかなる社会形態のもとにおいても人間は関心をもつことである。第三に、人間がなんらかのかたちで相互に労働しあうならば、かれらの労働はひとつの社会的な形態をうけとることになるのであって、このこともあらゆる社会形態に妥当すること

とであり、なんら神祕的なことではない。このように商品の価値の諸規定の内容をなす労働についてみれば、そこにはいかなる社会にも通用する自明のこののみがあり、べつにそれだけでは神祕的なところはすこしもない。

それでは、労働生産物が商品の形態をとると生ずるところの神祕的な性格はどこから生ずるのであるか。それは、あきらかに商品形態そのものから生ずる。労働生産物が商品形態をとるやいなや、ま先にあげた価値の諸規定の内容は、特殊な様式で表現されるようになる。第一に、労働は抽象的・人間的労働としてすべて同等であるということとは、労働生産物が商品として同等な価値をもつという物的形態、つまり商品という物的形態であらわされる。第二に、人間的労働力の支出の、その時間的継続による度量は、労働時間で直接にあらわされるのではなく、労働生産物の価値の大きさという形態ではかられる。第三に、労働をとおしての生産者たちの相互の関係、生産者たちの労働の社会的性格、生産者たちの社会的関係は、労働生産物という物の社会的関係という形態をとってあらわれる。いかえれば、労働をとおしての人と人との関係が、ここでは物と物との関係としてあらわれる。

そこで、労働生産物が商品形態をとると、人間自身の労働の社会的性格は、直接にはあらわされないうで、われわれには、労働生産物そのものが自然的な属性として社会的性格をもっているというようにみえ、また総労働にたいする生産者たちの社会的関係もかれらの外部に存在するところの諸労働生産物のひとつの関係としてわれわれにみえることになる。すなわち、人と人との社会的関係は、物の自然的な属性のようにはみえる。このような逆立ちした関係によって、労働生産物は、商品という感性的であると同時に超感性的である物となったのである。労働生産物が商品形態をとると、人と人との社会的関係は、労働生産物の価値関係という物と物との関係をとることになる。これを商品の物神的性格という。商品の神祕的な性格とは、このような商品の物神的性格にはかならない。

それでは、商品の物神的性格はどこから生じるのであろうか。それは、すでにのべたように、商品を生産する労働の独自の、社会的性格から生じる。

諸労働生産物が商品となるのは、総じて、それらが相互に独立して営まれる私的労働の生産物であるからにほかならない。これらの私的諸労働の複合体が社会的総労働を形成しているのである。生産者たちは、かれらの労働生産物を交換することによってはじめて社会的接触をむすぶ。そこで、私的労働は、労働生産物の交換という物的関係をおして、はじめて社会的総労働の一環であることが実証される。すなわち、商品生産者たちの労働そのものにおける人と人との社会的な諸関係は、直接的には現象しないで、むしろ、人と人との物象的關係、つまり物と物との社会的關係として現象するのである。

ところで、商品生産者たちの私的労働は、二重の社会的性格をもっている。すなわち、一方では、一定の有用的労働として一定の社会的な欲望をみたし、かくして、総労働の、社会的分業の自然発生的な体制の一環であるという意味において社会的性格をもち、他方では、それぞれの特殊な有用的私的労働は、ことなつた種類の他の有用的私的労働と交換可能であり、かくして、同等な抽象的・人間的労働であるという意味において社会的性格をもっている。そして、交換の内部においてはじめて、労働生産物は、商品として、感性的である使用対象性とはまつたことなる価値対象性をうけとるのである。

そこで、商品生産者にとっては、かれらの私的労働の二重の社会的性格は、生産物の交換において現象する形態としてしかとらえられない。すなわち、第一の私的労働の社会的に有用的な性格は、労働生産物が他人にとって有用な使用対象性をもつという形態でとらえられ、第二の労働の同等性という社会的性格は、労働生産物という物質的にあ

いことなる物の共通な価値性格という形態でとらえられる。

したがって、商品生産者たちは、労働生産物が同等な人間的労働のたんなる物象的な外被であるという理由によって、それらを価値として相互に関係させるのではない。その逆である。商品生産者たちは、かれらのあいことなる種類の労働生産物をまず交換において価値として相互に等しいとおくことにより、はじめてかれらのあいことなる労働を人間的労働として相互に等しいものだとするのである。そしてまた、商品生産者たちは、同等な人間的労働の量を相互に比較して生産物の交換をおこなうのではなく、もっぱら、自分の労働生産物とひきかえに他人の労働生産物をどれだけうけとれるか、つまりどんな比率で諸生産物が交換されるか、という交換比率に実践的な関心をよせるのである。このような商品の物神的性格は、商品生産社会において生じる客観的な現象であって、それを科学的な洞察によって分析し、そして暴露してみても、このような現象そのものをとりのぞくことにはならない。

このように、商品の物神的性格は、商品を生産する労働の独自の社会的性格にもとづくものであるから、商品生産社会以外の、他の生産関係をもつ諸社会においてはみられない現象である。商品生産社会以外の社会においては、労働は、その自然的形態、その特殊性のまま、直接に社会的形態となっている。ここでは、商品生産社会のように、労働生産物相互の関係をとおして発現はしないのである。

四

商品において表示される労働は、第二節の後半においてのべたように、具体的・有用的労働と抽象的・人間的労働という二重の性格をもっている。前者の具体的・有用的労働は商品の使用価値を形成し、そして後者の抽象的・人間的

労働は商品の価値を形成し、商品がもつ使用価値と価値という二つの要因をつくりだすことになる。したがって、商品を生産する労働がもっている二重の性格は、商品の二重の性格を規定しているわけである。

ところで、労働は、たんに商品を生産するばあいの労働にかぎって具体的・有用的労働と抽象的・人間的労働という二重の性格をもつわけではなく、労働は、総じて、どのような社会形態のもとにおいても二重の性格をもっている。

人間が生存し、社会が存続するためには、人間は労働をしなければならない。人間の労働は、人間の生存、社会の存続にとって基本的な前提条件である。したがって、このことは、どのような社会形態のもとにおいても妥当する、なくてはならない必要不可欠の条件であり、すべての社会にとってひとつの社会的な自然法則である。

人間の労働は、意識的・合目的におこなわれる。すなわち、あらかじめ計画され、予定された特定の生産物をつくりだすために労働力を支出する。労働力の活動そのものは、その目的、作業方法、労働対象、労働手段および結果が一定している活動である。つまり、労働力の支出、労働は、一定種類の、一定の形態を規定されている。たとえば、織物をつくりだす織物労働は、ある一定の織物をつくりだすことを目的としており、この目的を実現するために、特定の労働対象である一定種類の糸を原料とし、ある特定の労働手段である織機をつかって、特定種類の作業の労働をおこない、それによって織物という特定の労働の結果としての生産物をつくりだす。人間の労働は、つねに織物労働とか、裁縫労働とかというような一定の具体的な形態をとった労働である。簡単にいえば、人間の労働は、つねに具体的労働でなければならない。具体的労働は、人間の労働力の支出のさいの形態に関連してつかわれる言葉であるが、労働力の支出のさいの形態というものは、合目的支出という性格から当然、その目的によって、その結

果としてつくりだされる生産物の属性によって規定されている。したがって、たとえ一定の形態の具体的労働という形式をもっているにせよ、結果をもたないものは無用の労働であり、人間の労働であるとはいえない。人間は、人間のなんらかの種類の欲望をみたすための物をつくりだす、つまり人間にとって有用である物をつくりだすという目的をもって、労働力をその有用物をつくるという具体的な、特定の形態において支出し、その結果、有用物をつくりだすのであるから、具体的労働というものは、いつでもかならずその有用の効果との関連において考察され、それは有用の労働である。つまり、人間の労働は、つねにその一定の有用の効果に関連して一定の具体的な、有用の労働である。一定の具体的・有用の労働の結果は特定種類の生産物を生みだし、他の一定の具体的・有用の労働は他の特定種類の生産物を生みだす。あいことなる具体的・有用の労働は、ことなつた種類の生産物を生みだす。具体的・有用の労働は、人間の労働を質的に区別する。したがって、人間の欲望が多種多様になればなるほど、それをみたすための生産物も多種多様にならなければならず、それにともなつて具体的・有用の労働も多種多様になる。労働は、有用の労働としてはどんな社会形態ともかかわりのない、ひとつの人間の生存条件であり、人間の生活を媒介するための永久的な自然的必然である。このように、人間の労働は、つねにどのような社会形態のもとにおいても一定の形態をとっており、具体的・有用の労働である。

ところで、具体的・有用の労働が種々様々の形態でおこなわれていようと、いずれも人間の脳髓、神経、筋肉、手、足、感官などの人間の労働力の生産的な支出である。労働をこのような意味においてとらえれば人間の労働である。労働のこのような側面は、労働の特定の形態、つまり労働の具体的・有用の性格を捨象した労働であるという意味で抽象的労働ともいわれる。抽象的・人間の労働は、労働の内容をなし、具体的・有用の労働は、労働の形式をな

す。したがって、およそ社会の存続の条件となる人間の労働は、つねにかならず人間の労働力一般の支出として抽象的・人間の労働という一面をもつと同時に、他方において、その規定された有用的な形態における支出として具体的・有用的労働という他の一面をもっているものであり、この二つの性格をあわせもち、これが統一されたものとしてはじめて人間の労働があるのである。抽象的・人間の労働と具体的・有用的労働とは、べつべつに存在するわけではなく、人間の労働のあいことなる二つの性格であって、人間の労働は、つねに抽象的・人間の労働と具体的・有用的労働とが統一されたものである。したがって、人間が具体的・有用的労働をおこなうときには、それと同時に抽象的・人間の労働をもなしていることになる。このように、人間の労働は、つねに二重の性格をもっている。このことは、どのような社会形態のもとにおける労働についてもいえることである。

ところで、人間の労働力を担っているのは人間個人であり、労働をおこなうのは社会を構成しているひとりひとりの人間である。ひとりひとりの人間が自分自身で生産した労働生産物を自分自身で消費し、自分自身の維持、再生産をおこなっているならば、いいかえれば、労働生産物の生産、分配および消費において他の人間と相互になんらの関係をもむすんでいないならば、ここでは経済的な意味における社会は構成されていない。いわば、このばあいには、各個人が個々別々に「社会」をつくりあげているということになる。このようなばあいにおいても、なお労働は具体的・有用的労働と抽象的・人間の労働の二面を考慮にいれなければ理解することができず、各個人の個々の労働は二重の性格をもっている。しかし、このようなばあいの「社会」は、社会という言葉の本来の意味において社会とはいえず、経済的な意味における社会ではない。経済的な意味における社会が構成されるのは、多数の人間が生産、分配および消費において相互にかたくむすばれ、互に依存しあっているばあいである。このような本来の意味における

社会においては、人間の労働は、ただたんに個別的、個人的であるわけにはいかない。それぞれの人間の労働は、他人の労働と相互にかたくむすばれ、依存しあっており、各個人の労働全体が社会の存続を支えるものとなっている。したがって、このばあいには、労働は社会的性格をもつものでなければならず、個々人の個人的、個別的労働は社会的労働とならなければならない。

各個人が自然生的な紐帯によってかたくむすばれている原始共同社会、家父長制的社会、また社会の構成員が人格的な依存関係によってかたくむすばれている封建制社会、さらに生産手段が社会的に所有されており、社会の構成員が意識的にかたくむすばれている社会主義社会、これらの社会においては、各個人はすでに一個の結合した共同的労働力の一部分を構成するものとなっている。ここでは、各個別的労働力の担い手である個人は、ひとりひとりの人間の労働力が支出される以前に、人間の労働力の担い手のあいだに、あるいはその担い手と他の構成員とのあいだに一定の社会的なむすびつきがあり、この社会的紐帯を維持、再生産するためにのみ、人間の労働力の支出である労働があるということになっている。ここでは、人間の労働力そのものがすでに結合した社会的なものであって、労働ははじめから社会的なものであり、各個人ははじめから社会の共同的労働力の諸器官としてのみ作用するのである。このようなばあいには、人間の労働力の生産的活動としての労働は、人間の労働力一般の支出という意味での抽象的・人間の労働という側面においては、共同的労働力の諸器官として作用することにはならず、社会にとって必要な諸生産物をつくり出す特定の種々の質的なこととなる労働、すなわち具体的・有用的労働という側面において、いいかえれば労働の自然的形態における労働の側面において社会的労働としての形態となっている。つまり、これらの社会においては、労働の自然的形態、具体的・有用的労働の側面において、労働の社会的性格が直接にあらわれており、具

体的・有用的労働が社会的労働の形態となっている。

それでは、これらの社会における労働がもつ二重の性格のうちの抽象的・人間的労働という側面は、ここではどのような意味をもつものとして存在するのであろうか。

これらの社会においては、いまのべたように、人間的労働力はそもそもから社会的なものになっており、具体的・有用的労働が直接に社会的労働の形態となっている。ところで、各個人の労働力は、社会的な共同的な総労働力の一構成分子として、いいかえれば、おなじ人間的労働力として、社会の存続にとって必要な生産物を生産するために必要とされる各具体的・有用的労働面に配分しなければならぬ。この総労働力の配分においては、労働の抽象的形態、いいかえれば、おなじ抽象的・人間的労働の分量が労働時間というかたちで問題にされ、計算される。つまり、抽象的・人間的労働は、総労働力の配分において決定的な意義をもつのである。

要約すれば、つぎのようになる。これらの社会においては、各個人の人間的労働力は、はじめから社会的総労働力の一分子として存在しており、人間的労働力の支出、すなわち労働は、社会的に規制されており、はじめから社会的なものとなっている。そして、各人間的労働力の支出は、抽象的・人間的労働という側面において配分され、このようにして配分された人間的労働力の支出、労働は、その具体的形態においてその社会の存続にとって必要な生産物の必要量をつくりだし、かくして社会的労働であること、もしくは社会的労働となることが実証される。ここでは、労働の自然的形態、具体的・有用的労働がそのまま労働の社会的性格をしめすものとなっているのである。

ところが、私的所有にもとづく商品生産社会においては、労働の社会的性格は、このようなものとしてはあらわれない。

「所有」ということは、生産における客観的、物的要因である生産手段を誰が所有するかということ、いいかえれば、生産手段の所有関係をあらわすものである。この所有関係は、所有者が社会の構成員全体であるか、社会の構成員個人であるかによって社会的所有と私的所有の二つに大別される。したがって、私的所有とは、社会の構成員個人が生産手段を所有する関係である。生産手段を社会の構成員個人が所有する関係を私的所有というように「私的」というのはどういう意味であろうか。生産手段を社会の構成員個人が所有するということは、かれが所有する生産手段を、他の個人や社会の利害によって拘束されることなく、かれ個人の私的な利益を追求する目的のために、かれ個人の計算にもとづいて自由にすることができ、好き勝手に動かし、処分することができるということの意味している。したがって、社会の構成員個人の生産手段の所有は、たんに個人がもっているというような意味ではなく、私的所有であるといわなければならない。

私的所有のもとでは、社会に存在する生産手段は、それぞれ社会を構成する各個別的生産者によって排他的、独占的、私的に所有されている。各個別の生産者がどのような生産手段をどれだけ私有するかということは、かれらのそれぞれの境遇に応じて偶然に依存してきめられる。したがって、私的所有のもとでは、生産手段は偶然的に、無計画的に各個別の生産者のあいだに分散させられている。そして、生産手段の充用は、各個別の生産者の私的利益のために、私的計算にもとづいて自由に充用される。したがって、ここでは、社会を存続させ、支える各種の必要生産物を生産するための社会的総労働は、各個人のあいだに計画的に配分されることはとうていおこなわれえず、各個人のあいだでの社会的総労働の分割は、必然的に無計画的なもの、自然発生的なものとならざるをえない。つまり、私的所有のもとでは、社会的分業がおこなわれていなければならないが、しかし、その社会的分業は、私的所有の必然的な

一契機にもとづいて必然的に自然発生的な、無意識的な、無計画的な社会的分業とならざるをえない。

ところで、社会的分業がおこなわれているかぎり、社会の存続を支える社会的総労働は、社会を構成する個々の個別的生産者によって担われている。各個別の生産者の労働は、社会的総労働の一環をなす労働とならざるをえない。いいかえれば、社会的分業がおこなわれているかぎり、各個別の生産者の個人的労働は、社会的総労働の一分子を担うものとなっている。ところが、この各個別の生産者の個人的労働は、社会的分業が自然発生的なものであるばあい、したがってまた私的所有のばあいには、はじめから社会的総労働の一環をなす労働であるかどうかはわからず、直接に社会的労働としては営まれないで私的労働として営まれる。各個別の生産者の個人的労働がこのように私的労働として営まれるということを規定するのは私的所有である。私的所有のもとでは、労働はどうして私的労働として営まれざるをえないのか。

私的所有のばあいには、社会的に計画された生産手段と労働力の配分はなく、生産は無計画的におこなわれ、各個別の生産者は他の社会の構成員とまったく無関係に自分勝手に生産をおこない、かれらの相互のあいだになんらの統一的な意志もなければ、計画的なむすびつきもない。ここでは、各個別の生産者の労働は、他の個人の意志にかかわりなく、社会の利害に拘束されることなく、かれ個人の私的な利益を追求することのみを目的とし、かれ個人の私的な計算にもとづいて私的におこなわれるのであって、けっして社会的労働をなすものとして意識的、計画的におこなわれていない。したがって、私的所有のもとでは、各個別の生産者は私的生産者であり、かれらの個人的労働は、直接に社会的労働の一分子としておこなわれるのではなく、私的労働としておこなわれる。かれらの労働はあくまでも私的労働であるにすぎない。

私的所有のもとでは、このように各個別的生産者は私的生産者であり、かれらの労働は、私的労働として営まれ、直接に社会的労働として営まれない。もし、各私的生産者の私的労働がさいごまで私的労働としてとどまるとすれば、この社会には社会的労働というものはいっさい存在しないことになる。社会の存続は、社会的労働によってのみ保証され、支えられるのであるが、私的労働がさいごまで私的労働としてとどまるならば、社会の存続そのものがおぼつかないということにならざるをえない。しかし、私的所有にもとづく社会においては、労働はすべて私的労働というかたちでおこなわれており、私的労働以外には他のいかなる労働も存在しないということになっている。したがって、この社会が存続しうるためには、私的労働そのものがなんらかの関係において社会的労働になるということがなされなければならないことになる。そこで、問題は、直接には私的労働としておこなわれる各私的生産者の労働がどのような関係で、またどのような形態をとることによって社会的労働になるか、ということになる。

私的所有のもとでは、各私的生産者は、それぞれ個々人の私的利益のために私的に計算して労働をおこなうのであるから、それぞれの労働は、それぞれの私的な利益を追求する目的に合致したある特定の具体的・有用的形態をとっておこなわれる。かれらの労働がどのような具体的・有用的形態をとるかということは、他人と無関係に、社会によって拘束されることなく、かれらの私的利益を追求する目的にふさわしい具体的・有用的形態を自由に、自分勝手に、私的にきめられる。したがって、私的生産者の労働がとる具体的・有用的労働は、社会的な有用的諸労働総体の一分子となっているかどうか、社会的総労働の一環となっているものかどうかは、はじめからはわからない。私的生産者の労働がとる具体的・有用的形態は、私的な具体的・有用的形態であって社会的なものではない。したがって、私的所有のもとでは、労働は、具体的・有用的労働の側面においては、社会的労働としての性格をもちえない。

それでは、労働のもう一つの側面、抽象的・人間的労働の側面についてはどうであらうか。

私的生産者の私的労働は、かれの私的利益を追求する目的にふさわしい特定の具体的・有用的形態をとっておこなわれ、そのかぎりにおいては、他の私的労働とはなんの共通するところをもたないが、しかし、これらの私的生産者の私的労働は、その反面において、かならず、人間的労働力一般の支出という意味での抽象的・人間的労働という共通の一面をもっている。諸私的労働は、いずれも抽象的・人間的労働という側面で共通の性格をもっているからこそ、この共通の性格をもつものが私的所有にもとづく社会における社会を支える労働となることができることにならう。つまり、諸私的労働は、抽象的・人間的労働という一般性において社会的労働としての性格をもつことができるようになるのである。しかし、私的労働は抽象的・人間的労働という側面をもっているのであるから、私的労働はそのまま社会的労働としての性格をもつということにはならない。

私的生産者の労働力の支出、つまり労働は、かれ個人の個人的意志による私的行為であって、かれの労働力の流動も私的なものであり、他の構成員とのあいだに、他の構成員の労働とのあいだに、なんらの直接の関係をもちもっていない。私的生産者それぞれの労働力を流動させつつある過程は、私的な性格をもつ過程であり、「生きた労働」そのままでは私的労働であるにすぎない。私的労働は、いずれも抽象的・人間的労働という側面をもち共通の性格をもっているといえ、私的労働が、直接、社会的労働であるとはいえない。社会的であるというのは、たんに共通の性格をもっているというだけではけつてない。それぞれの労働がともに一つの社会を支える総労働の一分子をなしているということが、いいかえれば、私的労働が相互に関連をもつて存在しているということが、客観的に、現実には、社会的過程としてしめされていなければならない。しかし、私的労働は、その具体的・有用的形態においても、また

「生きた労働」においても、このような社会的な関連はなにももっておらず、あくまでも私的なものであるにすぎない。そこで、私的労働が社会的労働になるためには、どうしても「生きた労働」ではなく、その対象化した形態における労働において社会的性格がとられ、実証されなければならず、私的労働の抽象的一般性もその対象化した形態において社会的な問題とならなければならない。

そこで、私的労働が社会的労働になるためには、「生きた労働」としてでなく、それが対象化した形態、つまり労働生産物の形態において考慮しなければならないことになるが、この労働生産物に対象化されており、それを性格づけるのはいかなる労働であろうか。

私的労働としての私的生産者の具体的・有用的労働は、その生産物のある特定の使用価値を形成する。具体的・有用的労働が生産物に対象化したときに、私的生産者たちとのあいだに、他の私的生産者の私的労働とのあいだに、ならぬかの社会的な関連が生じ、それらの社会的なむすびつきがあきらかにされるのであろうか。

まえにのべたように、私的生産者の労働力の流動そのもの、つまり「生きた労働」そのものは、あくまでも私的労働であり、私的活動であるにすぎないから、その「生きた労働」そのものにおいては、他の社会の構成員とのあいだにならぬかの社会的なむすびつきもない。そこで、どうしても「生きた労働」そのものにおいてでなく、その対象化した形態において、労働生産物に対象化した形態において、それらの労働のあいだの社会的な関連、そのむすびつきをしめし、実証しなければならないことになるが、私的生産者の具体的・有用的労働が労働生産物に対象化したとしても、ただちにそれが社会的な性格をもつものとなるわけではない。私的生産者の具体的・有用的労働が社会的性格をもつということは、それが社会的総労働の一分子であるということであるが、このような性格をもつためには、それ

の対象化した労働生産物の使用価値が他人のための使用価値、社会的使用価値でなければならぬ。それでは、労働生産物の使用価値が社会的使用価値であることがどのようにしめされ、実証されるのであろうか。私的生産者は、かれ自身の労働生産物を他の構成員にしめして、その使用価値が社会的使用価値にほかならないことを証明するというわけにはいかない。たとえ、このように主張し、説明し、納得させることができたとしても、それだけでは、その労働生産物の使用価値が現実には社会的使用価値であることにはならず、社会的使用価値として実証されたことにもならない。社会的使用価値として実証されるためには、かれの労働の対象化した労働生産物がどうしてもそれを現実に使用価値として実現する他人の手にひきわたされなければならない。つまり、社会的使用価値としての実現、したがってまた私的労働の社会的労働としての実証は、ひとえに労働生産物と労働生産物とのあいだの関係、交換関係を通じてのみおこなわれざるをえない。労働生産物と労働生産物との交換は、一見、ひとつの使用価値と他の使用価値とをまたある私的生産者のある特定の具体的・有用的労働と他の私的生産者の他の特定の具体的・有用的労働とを直接に交換しあうもののようにみえる。しかし、交換というのは、このばあいには、両者を比較し、関係づけあい、ある一定の量的関係において両者をたがいにおきかえるということである。したがって、ある特定の使用価値と他の特定の使用価値とを直接に交換することはできないことであり、ある特定の具体的・有用的労働と他の特定の具体的・有用的労働とを直接に交換することもできない。両者の具体的・有用的労働は、その質をことにしており、したがって、その使用価値が質的にちがっているからこそ、労働生産物の交換という事態が生じてくるのである。それでは、かれらの労働生産物の交換において、なにを比較しあい、関係づけあい、一定の量的関係において相互におきかえるのであろうか。具体的・有用的労働の労働生産物に対象化した使用価値でないならば、それは、あきらかに特定の具体

的・有用的形態を捨象した労働のもうひとつの側面をなす抽象的・人間的労働の対象化したものでなければならぬ。

私的生産者は、ある特定の使用価値、生産物をつくりだすために、特定の具体的・有用的労働をおこなっているとき、同時に抽象的・人間的労働をおこなっている。ある私的生産者の特定の具体的な形態での労働のうちにくまれている抽象的・人間的労働は、他の私的生産者の他の具体的労働のうちにくまれているものとまったくおなじであり、したがって、すべての私的生産者がおこなう具体的・有用的労働は、そのうちに抽象的・人間的労働という共通の性格をもっている。したがって、この抽象的・人間的労働という共通の性格にもとづいて、各私的生産者の労働を比較しあい、関係づけあうことができるが、しかし、このことが可能となるのは、抽象的・人間的労働の流動過程が完了したあと、つまりそれが労働生産物に対象化しおえたときである。抽象的・人間的労働が流動されつつある過程は、具体的・有用的労働のばあいと同様に、各私的生産者の個人的な意志によるまったく私的な行為であって、人間的労働力を流動させつつある過程そのものにおいては、私的生産者相互のあいだにはなんらの関連もむすびつきも存在しない。抽象的・人間的労働は、さきの具体的・有用的労働のばあいと同様に、その流動過程が完了したときに、つまりそれが労働生産物に対象化しおえたときに、はじめて社会的な意味をもちうるものとなるのである。しかし、労働生産物は抽象的・人間的労働の対象化したものであり、それに抽象的・人間的労働が凝結しているとしても、だからといって直接的にそれが社会的生産物であるという社会的な性格および他の労働生産物と同等な共通の質をもつ生産物であるという社会的な性格をもつというようにはいえない。私的生産者の生産物はいかれの私的な生産物であり、私的労働の結果である。したがって、それがかれの人間的労働力の支出の結果つくりだされたものであるといっ

ても、それが社会的総労働力の一分子としての個別的労働力の支出の結果つくりだされた生産物であるかどうか、それが人間的労働力一般の支出、抽象的・人間的労働の生産物であるかどうかは、直接にはわからない。それが、抽象的・人間的労働の生産物であることを、このような意味において社会的労働であるということを実証するためには、他の私的生産者の他の生産物と関係をむすばなければならない。

労働生産物と労働生産物との交換関係、すなわち、これらの労働生産物相互の関連づけというものは、実は、それらのうちにふくまれている共通の質の労働である抽象的・人間的労働をば、現実にある特定の労働生産物に対象化したかたちにおいて、たがいにむすびつけあい、比較しあっていることにはかならない。私的生産者は、物のかたちをとってある特定の使用価値に対象化したところのおなじ抽象的・人間的労働を関連づけあい、一定の量的関係において相互におきかえあっているものであり、二つの労働生産物は、いずれも抽象的・人間的労働の担い手であればこそ、かかるものとして一定の量的関係において相互におきかえあうことができるのである。そして、交換関係において、労働生産物と労働生産物の相互の関連づけによって、それらにふくまれ対象化しているところの両者に共通な抽象的・人間的労働が客観的に実証され、表現されることになる。

したがって、私的生産者の私的労働は、その結果である労働生産物をとおして、その労働生産物に対象化している抽象的・人間的労働という一面において、はじめて他の私的生産者の私的労働——おなじくその労働生産物に対象化している抽象的・人間的労働——と社会的な関連をもつものとなり、相互におきかえあうことのできる共通の質の社会的労働であることが実証され、かくしてこの関連づけ、むすびつき、交換によってはじめて私的生産者の私的労働の生産物が社会的使用価値をもつ社会的生産物であること、つまり私的生産者の具体的・有用的労働が社会総労働

の一分子を担うものであることが、事後的に実証されることになるのである。したがって、私的労働は、その抽象的・人間的労働という側面において、しかもそれが労働生産物に対象化したものとして、ただこの側面においてのみ、相互にはじめて社会的な関係、社会的なむすびつきをもつものとなるのであり、かくして、社会的な関連のうちにおける、社会的労働となることができるのである。

「私的所有のもとでの私的生産者の私的労働は、同じ抽象的・人間的労働という共通の資格において、しかもその抽象的・人間的労働がある特定の使用価値をもつ労働生産物に対象化した形態において、相互に関係を結びあい、社会的関連をもち、かくして社会的関連のうちにおかれ、社会的労働に成るのであって、この等質的・共通の・抽象的労働として社会的労働に成ることによって、はじめてその具体的労働によってつくりだされた——あるいは、その私的労働の他の一面たる具体的労働の対象化としての——生産物の使用価値が他人のための使用価値、社会的使用価値であること、したがってかれの私的労働が社会の存続を支える社会的総労働の一分子を担うものであることが実証されるのである」(山本二三丸「人間的労働の経済学的考察」、『立教経済学研究』、第一六卷第三号、所収、一八九ページ)。

私的労働は、その結果である労働生産物とおして、その労働生産物に対象化している抽象的・人間的労働という側面において、はじめて他の私的労働と社会的な関連をもつものとなり、相互におきかえあうことのできる共通の質の社会的労働であることが実証されるのであるが、この抽象的・人間的労働の対象化されたもの、共通な社会的実体の結晶したものが価値である。私的所有のもとでは、労働は、具体的・有用的労働としては労働生産物の使用価値をつくりだし、抽象的・人間的労働としては労働生産物の価値をつくりだす。使用価値と価値という二つの要因をもつ労働生産物が商品である。

ところで、一つの商品をとりだして、この商品には抽象的・人間的労働が対象化されており、価値をもっているといくら主張しても、それは価値という社会的な性格を客観的にいいあらわしたということにはならない。したがって、価値は、抽象的・人間的労働の分量として、労働時間として絶対的に表現することはできない。ある商品の価値は、その商品と交換される他の商品によって相対的にのみ表現されるにすぎない。他の商品によって表現された価値が交換価値である。価値は必然的に交換価値としてあらわれざるをえない。

ところで、この価値の現象形態のもっとも完成された形態が貨幣形態であり、貨幣形態においては、諸商品すべてがそれぞれの価値を共同的に貨幣商品金によって表現する。貨幣の生成は、まずこの商品の価値の現象形態の発展という側面において、いかにして商品の価値は表現されるか、表現様式、現象形態はいかに発展するかという側面において、いかにして商品が貨幣であるかという側面において考察され、さらに、諸商品の相互の現実の交換過程において私的労働は社会的労働に転化されることが実証され、商品は価値として、そして使用価値として実現されることになるのであるが、この交換過程のなかにおいて生ずる矛盾を解決するものとして貨幣の生成が必要であるという側面において、なにによって商品が貨幣であるかという側面において考察される。これら二つの側面において貨幣の生成の問題が展開されなければならないということは、本節においてのべた私的所有のもとでは、私的労働が社会的労働に転化されなければ、社会の存続が不可能であるが、この社会的労働への転化は、ここでの労働が私的性格をもつ私的労働として営まれているから、労働そのものにおいて直接的にそれが社会的労働であることができず、それは対象化された形態で、労働生産物の形態においておこなわれることになり、しかもこの労働生産物が他の労働生産物と相互に関係づけあう、交換関係をむすぶということをとおしてのみおこなわれざるをえず、そして、交換がおこなわれう

るのは、労働の抽象的・人間的労働という側面において共通の質をもつからであるが、この抽象的・人間的労働は私的所有のもとでは価値の実体となり、その対象化されたものは価値となり、この価値が他の商品によって表現され、そして商品が現実に変換され、価値として表現されるということによって、はじめて私的労働は社会的労働に転化することができ、私的労働の具体的・有用的労働、その対象化されたもの、すなわち使用価値は、社会的な性格をもち、社会的使用価値となることができる、という私的所有のもとにおける労働の特殊な性格から生じていることなのである。このことは、貨幣がなぜ商品生産社会のもとにおいては必然的に生成してこなければならないか、なぜ商品が貨幣であるか、という問題にたいする解答をあたえる。

(昭和四二年五月)